

東京YMCA

12
2023

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

会員協議会「ソシアス2022」

今、平和について考える

11月20日、会員と職員との自由な協議と交流の場である「ソシアス2022」がオンラインで開催され、学生などを含む51人が参加。川平朝清氏（元NHKアナウンサー・昭和女子大学名誉教授）を講師に迎え、戦争が絶えない世界にあって、平和への取り組みを拓いていこうと意見を交わし合いました。本紙では、川平氏の講演「沖縄復帰50年と平和についてーヤングマン&ヤングウーマンに期待すること」をご紹介します。

忘れられない日

野防人さんの一首です。みなさんは、この数字の憶に留めています。しかし、「六二三」と聞いてピンとくるのは少数派だと思います。

「六二三、八六八九八
意味がすぐにお分かりで
一五、五三に繋げ我ら今
生く。これは、朝日新
聞の短歌投稿欄に掲載さ
れ、第27回朝日歌壇賞（2
011年）を受賞した西
憲法施行（五三）の日に

ついでに、多くの方が記
憶に留めています。しか
し、「六二三」と聞いて
ピンとくるのは少数派だ
と思います。

「沖縄は完全に復帰し
ていない」というのが、
長年沖縄で生活してきた
者としての実感です。

琉球王国として独自の
道を歩んでいた当時、沖
縄は中国（清国）と「朝
貢・冊封関係」を結び、
その恩恵にあずかっ

旅客列車の運転が始まっ
た際に、琉球は明治政府
へ慶賀使を派遣しまし
た。私の祖父は当時通訳
としてその使節に同行
し、汽車にも乗り、明治
政府の並々ならぬ近代化
政策を肌で感じた一人で
す。祖父の予感どおり、
間もなく琉球はこの渦中
に巻き込まれ、力づくで
日本に統合されて沖縄県
となりました。以後は、
中国の影響を受けた琉球
文化の排斥と徹底的な日
本人化が進められまし
た。この皇民化政策が見
事に成功し、沖縄戦の悲
劇へとつながったので
す。

昨今の日本の中国を含
む隣国への対応が、不器
用に見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

6月23日は、沖縄戦終
結、すなわち、日本本土
防衛の最後の砦とされた
沖縄における日米両軍の
組織的な戦闘が終わった
とされる日です。3カ月
にわたる沖縄戦では、県
民の約4人に一人が亡く
なり、軍人より民間人の
ほうに多くの犠牲が出ま
した。日本を終戦（敗戦）
に導く第一歩となった
「六二三」は、沖縄にと
って忘れることのできな
い日です。

戦後もアメリカの占領
下にあった沖縄は、19
72年、日本に復帰しま
した。それまで日本国憲
法の下にはなかった沖縄
が望んだことは、まさに
その前文にある「恐怖と

戦前の歴史についても
触れておきたいと思いま
す。

琉球王国として独自の
道を歩んでいた当時、沖
縄は中国（清国）と「朝
貢・冊封関係」を結び、
その恩恵にあずかっ

琉球放送初代アナウンサー。琉球放
送協会初代会長、NHK会長室主
幹（国際協力）、経営企画室国際
協力担当経営主幹等を歴任。NH
K退職後は、昭和女子大学で教鞭
をとる。2022年6月に第59回ギ
ャラクシー賞志賀信夫賞受章。元
東京YMCAアドバイザー。

「それは遺
伝だよ」と人
は言う。患
いがちな人に向
けた慰めにも
ならない言
葉。親子関係
を知っている
間柄なら、失
敗を仕出かす悪友へのざ
れ口。これに反して、幼
いのに見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

戦後もアメリカの占領
下にあった沖縄は、19
72年、日本に復帰しま
した。それまで日本国憲
法の下にはなかった沖縄
が望んだことは、まさに
その前文にある「恐怖と

戦前の歴史についても
触れておきたいと思いま
す。

琉球王国として独自の
道を歩んでいた当時、沖
縄は中国（清国）と「朝
貢・冊封関係」を結び、
その恩恵にあずかっ

琉球放送初代アナウンサー。琉球放
送協会初代会長、NHK会長室主
幹（国際協力）、経営企画室国際
協力担当経営主幹等を歴任。NH
K退職後は、昭和女子大学で教鞭
をとる。2022年6月に第59回ギ
ャラクシー賞志賀信夫賞受章。元
東京YMCAアドバイザー。

「それは遺
伝だよ」と人
は言う。患
いがちな人に向
けた慰めにも
ならない言
葉。親子関係
を知っている
間柄なら、失
敗を仕出かす悪友へのざ
れ口。これに反して、幼
いのに見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

「文化意伝子」である。

復帰50年に 思うこと

戦後もアメリカの占領
下にあった沖縄は、19
72年、日本に復帰しま
した。それまで日本国憲
法の下にはなかった沖縄
が望んだことは、まさに
その前文にある「恐怖と

戦前の歴史についても
触れておきたいと思いま
す。

琉球王国として独自の
道を歩んでいた当時、沖
縄は中国（清国）と「朝
貢・冊封関係」を結び、
その恩恵にあずかっ

琉球放送初代アナウンサー。琉球放
送協会初代会長、NHK会長室主
幹（国際協力）、経営企画室国際
協力担当経営主幹等を歴任。NH
K退職後は、昭和女子大学で教鞭
をとる。2022年6月に第59回ギ
ャラクシー賞志賀信夫賞受章。元
東京YMCAアドバイザー。

「それは遺
伝だよ」と人
は言う。患
いがちな人に向
けた慰めにも
ならない言
葉。親子関係
を知っている
間柄なら、失
敗を仕出かす悪友へのざ
れ口。これに反して、幼
いのに見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

「文化意伝子」である。

抑圧と同化と

戦前の歴史についても
触れておきたいと思いま
す。

琉球王国として独自の
道を歩んでいた当時、沖
縄は中国（清国）と「朝
貢・冊封関係」を結び、
その恩恵にあずかっ

琉球放送初代アナウンサー。琉球放
送協会初代会長、NHK会長室主
幹（国際協力）、経営企画室国際
協力担当経営主幹等を歴任。NH
K退職後は、昭和女子大学で教鞭
をとる。2022年6月に第59回ギ
ャラクシー賞志賀信夫賞受章。元
東京YMCAアドバイザー。

「それは遺
伝だよ」と人
は言う。患
いがちな人に向
けた慰めにも
ならない言
葉。親子関係
を知っている
間柄なら、失
敗を仕出かす悪友へのざ
れ口。これに反して、幼
いのに見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

「文化意伝子」である。

「文化意伝子」である。

「平和を実現する人々は、幸いである、 その人たちは神の子と呼ばれる」

— マタイによる福音書 5章9節

東京YMCAと親交のあるバングラデシュ・エディルプールYMCA
が運営するNFPE（働く子どもの学校）より。新しい制服と教材を
喜ぶ子どもたち



講師：川平 朝清さん

1927年台湾・台中市生まれ。琉
球放送初代アナウンサー。沖縄放
送協会初代会長、NHK会長室主
幹（国際協力）、経営企画室国際
協力担当経営主幹等を歴任。NH
K退職後は、昭和女子大学で教鞭
をとる。2022年6月に第59回ギ
ャラクシー賞志賀信夫賞受章。元
東京YMCAアドバイザー。

赤△三角

「それは遺
伝だよ」と人
は言う。患
いがちな人に向
けた慰めにも
ならない言
葉。親子関係
を知っている
間柄なら、失
敗を仕出かす悪友へのざ
れ口。これに反して、幼
いのに見える素晴らしい
才能へは首をかしげなが
らの賛辞となる▼この
「遺伝」を『広辞苑』第
四版は「その次の世代
に、体の形や色などの形
質の伝わる現象」と説く

▼英国のリチャード・ド
ーキンスはその著書『利
己的な遺伝子』で文化伝
達概念を伝えることば
ミーム（meme）を提
唱したが、編集工学研究
所の松岡正剛所長はこれ
を「意伝子」と訳した。

「文化意伝子」である。

（元副総主事 齊藤 實）

現代の子どもたちをとりまく「何か」

ー児童精神科医が語る



講師：田中 哲さん

子どもと家族のメンタルクリニック「やまねこ」院長。日本児童青年精神医学会理事。1953年東京生まれ。1983年札幌病院静療院児童部を中心に児童相談所、虐待防止協会代表、北海道LDサポート学会代表などを兼務。北小田原病院副院長、都立梅ヶ丘病院精神科部長、都立小児総合医療センター副院長を経て2019年よりメンタルクリニック「やまねこ」院長

11月26日、児童精神科医の田中哲さんを講師に迎え、オンライン講演会「教室に入れないー子どもたちをとりまく「何か」」が開催されました。小中高生の不登校が過去最多24万人(2021年度文科省調査)になる中、本講演会を主催した高等学院のスタッフをはじめ、保護者や全国の教育関係者など約100人が今日の社会状況を見つめました。講演内容を一部ご紹介いたします。

教室に入れない

不登校を治療の対象とする時代から、子どもの生き方の一つと捉える方向へと変遷してきましたが、この問題に解決の兆しはありません。僕自身は、どちらか一方に偏って子ども向き合うというより、不登校という現象がある社会そのものに目を向ける必要を感じています。

居場所である条件

「教室に入れない」子どもが増えていることをご存知でしょうか。これは、手厚い不登校対策の結果として今、新たに生まれている問題です。親や周囲の目を感じて学校へは来た、出席扱いにしてもらった、けれど、皆と一緒に教室で過ごすことができない。こうした子どもの存在は、子どもと社会の関係全般に不具合が生じていること、一つの象徴であるように感じています。

る人がいる」場所と言えます。

もう一つ重要な条件があります。それは、「そこにいることが選べている」ということです。そこにいることが義務になったとき、それはもはや居場所とは言えません。尚、誤解されがちですが、義務教育とは子どもが義務として受ける教育ではありません。子どもに教育の機会を与える義務を、大人が負うのです。そのために最善を尽くした結果としての学校が、大切な仲間と出会うたり自分らしさを発揮したりできる場所として、子どもにとって輝いて見える。これが本来の義務教育であつたはずですが、

「教室に入れない」という不思議な現象と向き合うことは、不登校という問題の本質を考えることにつながる、というのが僕の仮説です。最近よく「居場所がない」という言葉が聞かれます。そもそも居場所であるための条件とは何でしょうか。次のような条件が揃ったとき、その場所はその子どもの居場所になると僕は考えます。第一に、ありのままの自分でいられること。「キャラを演じる」必要がなく、借り物でない自分として振る舞える場所であるということです。このとき、同じ場所と時間を共にする他者の存在も欠かせません。居場所とはつまり、「自分らしさを発揮して、それを受け入れる」という風にならなければなりません。

学校の役割とは

ここで、ヒトという種の子育ての特徴を紹介しましょう。それは、「子どもを他者に預ける」ということです。人間以外の動物は、基本的に我が子を誰かに預けたり託したりはしません。人間はそうすることで、子どもに大切な経験をさせる、つまり、人の間で生きていくことを覚えさせていくのです。そうした経験を通じて、子どもは人と関わることに心を抱くようになり、進んでその術を身に付けていきま

す。このような人の育ちのプロセスにおいて、学校は本来大いに力を発揮することが期待される場所です。しかし、学校や学級を自分の居場所でないと感じている子どもが多くなっている。これは、私たちが全体に関わる問題です。現代社会の一つの「doing主義」が挙げられます。現代社会の特徴を説明する言葉の一つに「doing主義」が挙げられます。人間のあり方／あることが「being」、行動／することが「doing」です。doingの背後には、必ずbeingがある。子どもは意味の無い行動はしません。その子がどんな性格で、どんなことを考え、どんな人に囲まれて、今どんな気分であるかというbeingの結果として、こう言う、こうするといふdoingが生まれるのです。ところが、beingに

安全なヨソの崩壊

人の育ちのプロセスにおいて、コミュニケーションは重要な役割を果たします。コミュニケーションとは、家庭という「ウチ」と、社会という「ヨソ」の中間にある、いわば「安全なヨソ」です。家族間のコミュニケーションは言葉だけに依存しませんが、そこには「言わなくても分かってくれる」前提がある。ところが、社会という「ヨソ」でそんな甘えは通用しません。自分は何がしたい、できるかをきちんと伝えられなければやっていけない。つまり、「ウチ」と「ヨソ」の間には大きな隔た

「重く傷ついても

ところが、学校に行きたくなくても、行かなければ「不登校だ」「問題だ」と騒ぎになる。これは周知の事実です。だからどうにか登校はするけれど、教室の前で立ち止まってしまふ子どもが出てくるわけです。ここで目を向けるべきは、「学校に行きにくい」子どもが、さらに「教室に入れない」ことにより、二重に負い目を感じ傷ついていることです(Ⅱ図3)。

beingに焦点を当てる

beingに焦点は当てることが、全体の寛容も生み出します。自分の安心点が守られれば、他者に対して寛大になれるものです。つまり、「学校に行きにくい」という問題は、その子ども一人ではなく、みんなの問題として受け止めて、向き合う必要があるということです。すると、例えば人と合わせるのが苦手な子どもや、マイノリティと呼ばれる子どもにとっても、教室はますます「自分らしさを発揮できる場所」として輝きを増すでしょう。

(まとめ・広報室)

図1 子どもは本来、家庭からコミュニティ(安全なヨソ)を経て、見知らぬ人のいる社会に出ていく

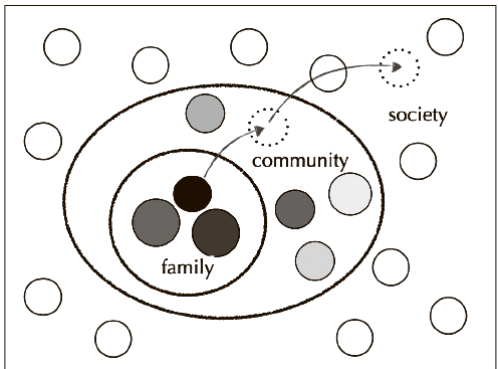


図2 子どもの周りの「安全なヨソ」が失われつつある

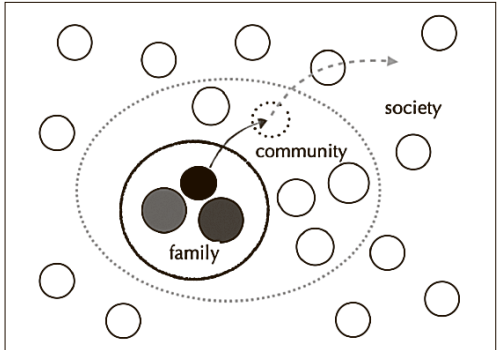
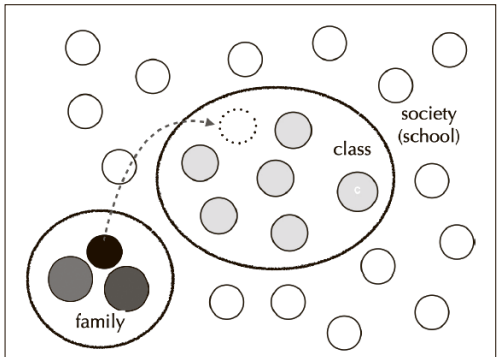


図3 教室に入れない子どもは、二重の「ヨソ」を経験している



■ウクライナYMCAとクリスマス交流

東京YMCAは、ウクライナYMCAと約20年に渡り交流を続けています。今年もウクライナの子どもたちにクリスマスプレゼントを贈ろうと、2022年11月26日、東陽町センターの英語クラスの子どもたちがカードや動画を制作。今回は、ウクライナからの留学生5人が帰国生クラスに加わり、プレゼントの制作を手伝いながら、子どもたちとの交流を楽しみました。



恒例のカード作りが特別な時間に

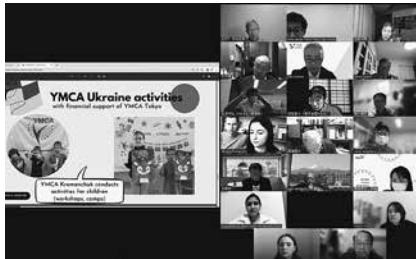
留学生たちは、子どもたちと英語で会話をしながら、クリスマスにちなんだウクライナ語の発音や綴り方を教えてくれました。留学生のお兄さんお姉さんが積極的に話しかけ寄り添ってくれたため、最初は恥ずかしそうにしていた子どもたちもすぐに打ち解け、最後は「もっと続けたい」との声も聞かれました。

子どもたちは、異文化と繋がるためのツールとして英語を日々懸命に学んでいます。一方で、コロナの影響もあり、このツールを実際に用いたり活かしたりすることが難しい状況にありました。今回の交流を通して、英語を学ぶ意義を自然と再認識をすることができたと感じています。ウクライナとの繋がりを大切に、今後もさまざまな形で英語を学ぶ意義を子どもたちに伝えていきたいと願っています。

(東陽町キッズ英語 上野 友里)

■ウクライナYMCA支援活動報告会

ウクライナYMCAを支援してくださる方々への感謝と報告の機会として、2022年12月14日、東京とキーウを直接オンラインでつなぎ、ウクライナYMCA総主事とスタッフ10人による報告会を開催しました。



70人がウクライナの生の声を聞く

昨年2月に突如としてウクライナの平和が奪われる事態となって以来、東京YMCAはウクライナYMCAと頻繁に連絡を取り合い、支援を続けてきました。報告会では、ウクライナの現状や支援金を用いて行われた活動について現地スタッフからの報告を聞きました。

インフラ被害も深刻な中、ウクライナYMCAは国際社会に支えられ、通常運営を継続。子どもから高齢者まですべての人びとに対してプログラムを提供しています。東京YMCAから送金をした30,000ドルの支援金は、主に子どものキャンプやファミリーキャンプに活かされ、1,000人の子どもが参加しました。

厳しい冬を迎え、苦しい状況は変わりませんが、総主事からは「いかなる状況でも活動は継続する。協力すれば、乗り越えられる」と力強い言葉が語られました。

(国際・総合教育事業部 松本 数実)

■医師たちへ心を届けるーしののめこども園

しののめこども園の子どもたちは、毎年クリスマスが近づくと毛糸遊びの一環としてオーナメントを手作りしています。完成したオーナメントは家に持ち帰り、保護者の方にお金に換えてもらって、4週に渡るアドベント礼拝の場で献金するという献金活動を続けています。神さまにお捧げするそのお金は、神さまの御用として役立てられていく。このようなことを感じながら、子どもたちは日々の感謝の気持ちを込めて一連の献金活動を行うのです。

2022年12月14日、子どもたちのお金は、「昭和大学江東豊洲病院の医療従事者の方々」に捧げられました。この活動の意味を汲み取って、子どもたちには視野を広げ、身近な世界で「自分たちにできること」を考えられるようになってほしい。さらに、多忙な医療従事者の方々にも同じように温かなクリスマスを迎えてもらいたい。そのような思いを込めて、今年はいち味違った活動として職員たちが企画し、医療従事者の方々と交流も取り入れた特別な献金活動となりました。

献金に先立って11月14日、昭和大学江東豊洲病院より3人の小児科医・薬剤師の方々が来園。普段の仕事について丁寧にご紹介くださいました。先生方の分かりやすいお話に、子どもたちは興味津々の様子で耳を傾け、質問タイムでは「寝る時間はあるの?」「ご飯は食べられているの?」「点滴はどんな時にするの?」「お医者さんは足りているの?」など、真っ直ぐに先生方を見つめ質問を投げかけていました。この交流を経て、「いつも頑張って病気を治してくれるお医者さんのために」と、思いを寄せながらオーナメント作りに取り組んだ子どもたちは、毎週大切に献金をしてくれました。こうして1カ月後、再び来園された先生方に、たくさんの気持ちがこもった献金、そしてオーナメントを贈るができました。

他者を思い、考える時間を持つことや、その気持ちをカタチで表現して届けた経験は、子どもたちにとって尊い学びの機会になったことと思います。

(しののめこども園 木下優香)



病院入口に飾られた贈りもの

山手センター 地域に根づいて70年

山手センター館長 小畑 貴裕

2022年10月、東京YMCA山手コミュニティーセンターは70周年を迎えました。新宿区西早稲田にある山手センターは、東京YMCAの第二のランチとして、この地にあった木造の建物を買って1952年に誕生。英文タイピスト学校、聖書研究会、讃美歌練習会などに始まり、開設翌年には子どものキャンプや書道、絵画教室、さらに東京山手ワイズメンズクラブも発足。1954年には山手学舎（男子学生寮）が開寮し、活動の幅を広げてきました。

1969年、YMCA運動の要となるリーダーシップ開発の必要性が強く認識される中でILD（リーダーシップ開発研究会）が発足。東京YMCA90周年プロジェクトによって1972年に新会館を与えられると、神田から移転された国際ホテル専門学校、障がい児の体操や水泳教室なども始まります。

1981年、「アジアの開発と私たち」をテーマに国際理解講座を開催。今日の開発教育やSDGsにつながる活動がこの頃既に芽吹いていました。1991年にSTEP（保育室）、1998年には新しいオープンスペースliby（安心して集える若者の居場所）、近年では通信制サポート校の高等学院（2013年）や放課後等デイサービスPIT西早稲田（2019年）を立ち上げました。



時代や地域のニーズに応えてこれまで山手センターで展開された100に上る活動の一つひとつには、「語られるべき歴史」とそこに携わった人びとの熱い思いがありました。これからも、多様な人びと、世代が集まるこの場所から、地域の皆さまと共により良い社会づくりを目指して歩んでまいります。

未来志向の「リーダー会」に3世代が結集

2021年11月27日、山手センター史上最大規模の「リーダー会」が開催されました。参加者は、乳幼児から80代に渡るボランティアリーダー経験者とその家族の125人。かつて「リーダー活動」に没頭した人、現在もOBOGとしてYMCAの活動を担う人、そして現役の学生や社会人リーダーなど、集った一人ひとりの立場や思いはさまざまでした。

2部構成となったリーダー会の前半は、多世代クロストーク「わたしと山手センター」。20～60代の各世代を代表するリーダーOBOGをパネリストに迎え、それぞれの経験が分かち合われた後、分団での交流へと進みました。第2部は、各々が好きな場所で好きな人と好きなように過ごす自由時間。「キャンプソング」「クラフト」「思い出」「だんらん」など、会館の各所に設置されたOBOG主催のブースを、参加者が思い思いに巡りました。

仲間がほしい、人の役に立ちたい、夢を叶える糧としたい、子どもが好き、友人に連れられて、自分さがしなど、リーダーとなる動機は十人十色です。その中で、参加者の話題に度々上がった共通ワードは、「出会い」「成長」そして「つながり」でした。

「さっき不意に声を掛けてくれたのが、学生時代に携わった活動に参加していた子どもだった。時を経て同じリーダーとなった懐かしい人との再会が何より嬉しかった」「キャンプソングや遊びを通じた子どもとの関わり方、自己表現の仕方、YMCAらしい人との向き合い方など、リーダー活動の中で自然と身に付けたことが、今活きている」「転職を決意し、現在は社会福祉士として生活困窮者や障がい者と共に歩む自分の原点がここにある」「リーダー活動では、他者との関係の築き方を実践を通して学んだ。自分の弱さと正面から向き合うことの連続だったが、今を生きる確かな力が養われた」など、パネリストを中心に個々のストーリーが力強い言葉で分かち合われました。

今回の企画と運営を担ったのは、山手センターに縁ある12人のリーダーOBOGと職員から成る「山手70周年記念企画実行委員会」。2021年11月より十数回ミーティングを重ね、歴史資料の収集や広報活動、物品調達、ボランティア確保、座談会開催（本紙7・8月号掲載）など、約1年かけて準備に奔走しました。原動力となったのは、「現役リーダーを応援したい」そして「離れていてもつながっている」という強い思い。「YMCAらしさはリーダーの存在にある。『リーダーこそYMCA』という自信と希望をもって、共に歩もう」と呼び掛けた、浅羽俊一郎実行委員長の冒頭の挨拶に応えるように、リーダーたちの前向きなエネルギーが山手センターに充満する一日となりました。



全員でキャンプソングを合唱。ギターやバイオリンの伴奏と手拍子で会場は一体感に包まれた



参加者の「リーダー名」が次々と記された手作りのサインボード。終了後アンケートには、「現役とOBOGのつながりを深めたい」との声が多数寄せられた